

16年県内登録

がん患者1.5万人 全国19位

厚生労働省が初めて公表した「全国がん登録」に基づくデータで、2016年に県内でがんと診断された患者の詳しい実態が明らかになった。患者数は1万5109人で、都道府県で多い方から19番目。部位別の罹患率（人口10万人当たりの発症者数）では子宮がんが25・2人（全国平均33・3人）と、全国でも低かった。県は分析を進めながら実情に応じた対策を講じ、がんの早期発見や予防に力を入れていく方針。（河内慎太郎）

	総数	男性	女性
全部位	384.8人 (41位)	458.6人 (31位)	331.2人 (43位)
大腸	51.8人 (46位)	64.4人 (47位)	41.1人 (44位)
胆のう・胆管	5.9人 (47位)	6.9人 (47位)	4.9人 (34位)
子宮	-	-	25.2人 (47位)
脳・神経系	3.1人 (37位)	2.9人 (46位)	3.3人 (17位)
膵臓	14.3人 (9位)	17.8人 (8位)	11.3人 (27位)
腎・尿路	11.5人 (33位)	15.9人 (39位)	7.6人 (6位)

※は全国最低。脳・中枢神経系の男性は46位だが、鳥取県と同じ順位のため実質的に全国最低

県内の人口10万人当たりの発症者数（抜粋、かっこ内は全国順位）

全国がん登録は、がん院に患者情報の登録を義務付けてきた全ての病務付けた制度で16年にス

子宮がん罹患率は最低

県内で2016年に診断されたがんの部位別順位

順位	全体	男性	女性
①	胃	胃	乳房
②	大腸	前立腺	大腸
③	肺	肺	胃
④	前立腺	大腸	肺
⑤	乳房	肝臓	子宮

胃がんは全国最低。肺がんは46位だが、鳥取県と同じ順位のため実質的に全国最低

ターゲット。厚生労働省の1月発表のデータによると、16年がん患者は17・8万人（全国平均17人）で全国8位、女性では腎・尿路が7・6万人（6・5人）で6位だった。県内の患者の部位別で最も多かったのは胃の2333人。大腸2086人、肺1992人、前立腺1460人、乳房1300人と続く。全国平均の61・4人を大きく上回る51・8人。男女1タでもこれらの部位が別では男性が全国最少の上位5位を占め、岡山と64・4人（77・5人）、全国で大きな違いはなかった。女性では44位の41・1人（47・3人）だった。

逆子に子宮がん以外で最も多かったのは胃の2333人。大腸2086人、肺1992人、前立腺1460人、乳房1300人と続く。全国平均の61・4人を大きく上回る51・8人。男女1タでもこれらの部位が別では男性が全国最少の上位5位を占め、岡山と64・4人（77・5人）、全国で大きな違いはなかった。女性では44位の41・1人（47・3人）だった。

都道府県ごとに年齢構成が同じになるように調整し、人口10万人当たりで算出した罹患率で比較し、一長期的な追跡調査を続けていけば、より地域の特長が見えてくる可能性がある」と指摘。県医療推進課は「全国と岡山で傾向に差があるがんについては、その理由を分析していく必要がある。罹患率が高いがんは重点を当てた取り組みを進めていきたい」としている。



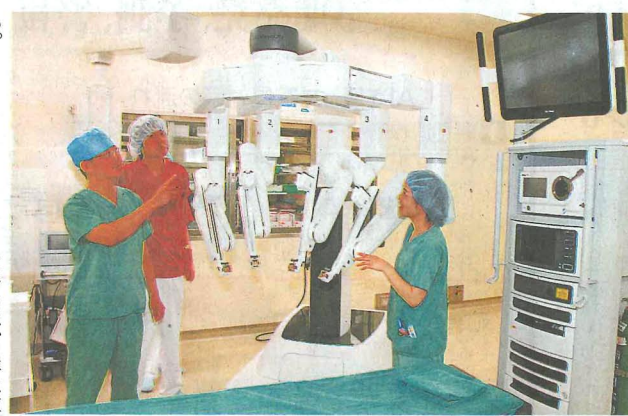
川崎医科大付属病院 鶴田医師に聞く

大腸がん増加懸念 生活習慣見直し、検診受けて

「大腸がんの具体的な症状は、食べ物の最後の通り道である大腸にできる悪性腫瘍で、直腸とS状結腸での発生が約7割を占める。早期は自覚症状がほとんどなく、進行すると血便や腹部の膨満感、腹痛といった症状が現れる。」

「大腸がんの具体的な症状は、食べ物の最後の通り道である大腸にできる悪性腫瘍で、直腸とS状結腸での発生が約7割を占める。早期は自覚症状がほとんどなく、進行すると血便や腹部の膨満感、腹痛といった症状が現れる。」

「大腸がんの具体的な症状は、食べ物の最後の通り道である大腸にできる悪性腫瘍で、直腸とS状結腸での発生が約7割を占める。早期は自覚症状がほとんどなく、進行すると血便や腹部の膨満感、腹痛といった症状が現れる。」



川崎医科大付属病院が直腸がん手術で使用している内視鏡手術支援ロボット・ダビンチ

「国立がん研究センターは大腸がんを発生させる確率を男性は11人に1人、女性は13人に1人と推計している。食の欧米化や高齢化が原因と考えられ、国内の患者数は年々増えている。加工肉の摂取、飲酒、喫煙などによって発症リスクが高まるとされる。」

「生活習慣を見直し、禁煙したりしてほし

改定で、直腸がんも内視鏡手術支援ロボット・ダビンチを使った手術が保険適用になった。前立腺がんでは既に適用になっている手術法で、われわれは昨年11月に導入した。これまでに40〜70代の直腸がん患者5人を対象に行った。狭い箇所でも緻密な動きが可能で、狙った腫瘍を正確に切除できた。3次元画像を見ながら行うので、残すべき組織を傷つけにくく、神経障害の恐れも減らせる。